

研究ノート

書評 福谷彬著 『南宋道学の展開』

中嶋 諒

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

本書は、中国南宋前期における、いわゆる道学諸派の思想動向を、その政治姿勢や経書解釈などに論及しながら分析した労作である。なおそのタイトル『南宋道学の展開』は、土田健次郎氏『道学の形成』（創文社、2002年12月）を意識して題されたものであろう。『道学の形成』は、「北宋初から南宋にかけての思想動向の中での道学の形成と展開を浮き上がらせようと試みた」ものであるが、土田氏自身、「二程と朱熹の間に介在する存在として重要な湖南学についてはほとんど触れえず、道学との関係で避けては通れない永嘉永康学派については見通しのみの叙述で終わった」と述べている（以上、540頁。なお土田氏は、のちに「宋代湖南学の思想的位置」（『東方学』135、2018年1月）など、湖南学にかかわる専論をいくつか発表している）。本書はこのことを踏まえて、『道学の形成』の時点では十分に論じられていなかった湖南学（胡宏）や永康学派（陳亮）を含めた南宋道学諸派の全体像を描写することに主眼が置かれているといえるであろう。

さて土田氏は、『道学の形成』の序章において、「道学」を程学（程子学派）と定義し、さらに湖湘の学（湖南学）、浙中の学（呂祖謙及びそれと密接な関係を持った陳亮）、江西の学（陸学）、そして閩学（朱子学）が「道学」の名の下にまとめられたことがあったと指摘する（13～18頁）。福谷氏も基本的には、この土田氏の理解に拠って、「本書で「道学」という場合には、狭義の程朱学ではなく、南宋の閩学・浙学・湖南学・江西学を総称してということとする。また、道学内部に異なる学派が存在することを強調する際には、「道学諸派」と呼ぶこととする」という（16頁）。

さてこの道学諸派にかんする研究史については、かつて高畑常信氏が『宋代湖南学の研究』（秋山書店、1996年12月）において（「道学」という語は用いていないながらも）、「湖南学・陸学・浙学の立場に立って朱子学を考える研究では、吉田公平氏の『陸象山と王陽明』（研文出版、1990年1月）が陸象山から朱子を考えただけのものであり、庄司荘一氏の『中国哲学史文学道』（角川書店、1993年11月）が浙学から朱子を考えただけのものであり、本書が湖南学の立場に立って朱子を考えることを目指した最初のものである」とまとめている（1～2頁、評者が体裁のみ整えた）。その後、陸学研究として、小路口聡氏『即今自立の哲学 陸九淵心学再考』（研文出版、2006年12月）なども発表されたが、一人の研究者が、これら道学諸派の各々について網羅的に分析した著書は、少なくとも我が国においては、いまだ見あたらなかったように思われる。また評者もこのような問題意識から、かつて『陸九淵と陳亮 朱熹論敵の思想研究』（早稲田大学出版部、2014年10月）を執

筆したが、ここでは江西学（陸九淵）、浙学（陳亮）両者の思想を検討したのみであり、閩学（朱熹）については正面から取り上げず、また湖南学については一切言及しなかった。

これに対して本書は、湖南学（胡宏）、閩学（朱熹）、江西学（陸九淵）、浙学（陳亮）のそれぞれを、あまねく取り上げた意欲作である。もっとも福谷氏は「本書ではあくまで道学諸派に対して個別に設定したテーマをめぐって考察したのみで、必ずしも全体で共通した課題をめぐって分析できたわけではない」（338頁）というが、まずは道学諸派のそれぞれに対して、一人の研究者が正面から向き合った著書はこれまでになく、本邦初の試みとして特筆されるべきであろう。

さて本書で一貫して説かれているテーマの一つは、「道学諸派の思想家は、『孟子』から何を学び取り、それぞれいかに発展させたか」ということである（343頁）。福谷氏は、本書の冒頭において、「聖人学んで至るべし」（聖人可学）という主張が、「道学」を特徴づけるのにふさわしい言葉である、という従来の説をいったん受け入れた上で、この「聖人学んで至るべし」という主張のみに着目すれば、それは道学者の独創ではなく、『孟子』（具体的には、告子上「人皆な以て堯舜と為るべし」など）が先行していると強調する。実際に、周敦頤『通書』聖学や、程頤「顔子所好何学論」などに見える、初期道学者の聖人可学論は、『孟子』の言葉を祖述する形で説かれているという（18～19頁）。

さらに福谷氏は、『孟子』万章上「吾れ豈に是の君をして堯舜の君と為らしむるに若かんや、吾れ豈に是の民をして堯舜の民と為らしむるに若かんや」云々が、君主や民衆といった他者を、聖人へと導くことを主張している点に注目する。ここから道学者たちの聖人可学論にもまた、自己の修養論としての「修己」の思想のみならず、他者を教え導くことへと発展する「治人」の思想が内包されていたと考える（20～21頁）。そしてこのような見地から本書では、道学者たちが他者をいかに説得するかという説得術や、いかに輿論を形成するかという政治姿勢にまで議論が及ぶこととなる。

ここで本書の構成を確認しておきたい。ただし煩を避けるため、各部各章のみを取り上げて、各節各項、およびコラム等については割愛する。

序 章

第一部 思想形成としての古典解釈

第一章 孔孟一致論の展開と朱熹の位置——性論を中心として

第二章 経書解釈から見た胡宏の位置——「未発・已発」をめぐって

第二部 道学者の思想と政治姿勢

第三章 陳亮の「事功思想」と孟子解釈

第四章 淳熙の党争下での陸九淵の政治的立場——「荊国王文公祠堂記」をめぐって

第五章 説得術としての陸九淵の「本心」論——仏教批判と朱陸論争をめぐって

第六章 消えた「格物致知」の行方——朱熹「戊申封事」と「十六字心法」をめぐって

第三部 政治から歴史世界へ

第七章 『資治通鑑綱目』と朱熹の春秋学について——義例説と直書の筆法を中心として
終章

各部各章の具体的な内容については、すでに福谷氏自身が、序章や終章などにおいて丁寧にまとめており、ここで評者がさらに概括することは、屋上屋を架すことになりかねないので省略する。ただ評者は、第二章から第五章、すなわち湖南学（胡宏）、浙学（陳亮）、江西学（陸九淵）を論じた章のいずれもで、『孟子』梁恵王下の数段をもとに議論が組み立てられていることに着目したい。これはいわゆる「好意」「好色」「好貨」「好勇」にかんする箇所であるが、このうち「好色」の一段については、福谷氏自身が訳出しているので、まずはそれを引用しておこう。

齊の宣王「私には悪癖がある。好色なことだ。」孟子「昔、周の太王（古公亶甫）もまた好色で、夫人の姜氏を愛しました。『詩経』にこうあります。「古公亶甫は、早朝馬を駆り、西水の流れに沿って、岐山のふもとに着き、ここで姜とともに、住まいを営んだ。」（『詩経』大雅「綿」）と。古公亶甫の頃、家の中には婚期を逃して愚痴をこぼす女はおらず、家の外には年頃になっても独身の男はおりませんでした。王がもし好色で、万民と同じであれば、王者となることに何の不足がありましょう。」（348頁）

ここで齊の宣王は、孟子に自身の欠点として「好色」を挙げつつ、それゆえ自分には王道を行う資質がないという。これに対して孟子は、宣王に「好色」という欲望を抑えることを説かず、かえって『詩経』の故事を引き、古の聖王もこの欲望を持っており、それをきっかけに王道を実現したのだと説く。

さてこれを踏まえて、胡宏は「天理」と「人欲」との関係性をとらえることとなる。すなわち胡宏は、節度に適うことに「天理」、節度から外れることに「人欲」を見出したのであり、さらにいえば「善」「悪」とは、「已発」の状態において発動した心が、節度に中るか否かによって生ずるものだと理解していたのである。胡宏は、欲求の正しいあり方に「天理」を見出そうとしており、このような欲求を「公欲」として、強く肯定的にとらえていた。欲望を根底から消し去ろうとする態度は、かえって拒絶されていたのであり、「人欲」を根底から滅却すべき対象とする朱熹の立場とは、根本的に異なるものであったといえるのである（以上、98～106頁）。

また陳亮は、「好色」などの欲求は、聖王と百姓が同様に持っているもので、聖王はこれらの欲求を自分だけではなく、百姓にも叶えることで「王道」を実現したのだという孟子の主張に注目した。そしてこれらの欲求は、一身においては悪だが、万人においてそれを達成しようと「拡充」すれば、王道のきっかけとなり、善であると説く。このように陳亮は、万人と心を等しくするという意味での動機の公共性を求めていたのであり、このようなあり方を「義」、自分一人の利益を求めることを「利」とした。これは朱熹のように私欲を滅却するのではなく、私欲を万人と共同的なものへと発展させることを目指す、いわば欲望肯定的な工夫論ともいえるものであった（以上、146～148、154～156頁）。

さらに陸九淵は、孟子が齊の宣王を説得した方法自体に注目する。孟子は宣王に対して、「好色」などの要求は、民と同じくするものであり、正しく対処することで、むしろ王道政治を行う契機となると説得したが、陸九淵は、自らの他者に対する説得方法を、このような孟子の説得方法に

重ね合わせて説明しているとされる。すなわち陸九淵にとっては、万人の共感を得られる主張こそが「本心」であり、「理」であるといえ、自分だけの意見や他者を打ち負かすための議論をすることは、他者から共感を得られる「本心」ではなく、「私心」を持つことを目指す行為であり、自ら真理から遠ざかる行為にはかならないと否定された（以上、217～218、239頁）。そしてこのような見地から、自分の考えを絶対的に是として、異論を認めず他者に広めようとする朱熹の態度を批判したのである（199頁）。

一方で朱熹は、これら『孟子』梁惠王下の「好意」「好色」「好貨」「好勇」をめぐる議論に対して、「孟子は説き方が粗い」、「孔子と比べて説き方に弊害がある」などと弟子に漏らしていたという。このことから朱熹が、これらの段に対して疑問をもちつつ接していたことが分かる（156頁）。これに対して朱熹は、『孟子』の義利の弁や、異端弁正にかんする箇所に着目し、それを自分が他者と議論する際の姿勢のモデルとしていた。かくして朱熹は、他者の誤りを根本から否定し、異端を封殺する態度を貫いたのである（346頁）。

以上、本書のうちから、『孟子』梁惠王下の「好意」「好色」「好貨」「好勇」をめぐる議論に着目してきた。もちろんこれは、本書の内容の一部分に過ぎないが、ここから道学諸派における朱熹の特異性が垣間見えよう。例えば胡宏と陳亮は、いずれも私欲の適切なあり方を探り、そこに「天理」や「義」を見出して、それを肯定してきた。もちろん胡宏と陳亮のいう私欲の適切なあり方には各々特徴があり、一概に両者を結びつけることはできないが、少なくとも私欲の滅却を目指す朱熹の立場から考えるならば、両者にはいくらかの共通性が見出されるとともに、かえって朱熹の特異性が浮き彫りになってくるのである。

さて最後に、評者の思うところを述べておきたい。本書は『南宋道学の展開』と題されておきながら、実際には朱熹の活躍した南宋前期の思想状況を分析するにとどまっている（本書末尾の「関連事項年表」も、朱熹の没年をもって締めくくられている）。しかし望蜀の嘆を発するならば、南宋後期における朱熹初伝、再伝世代の思想動向についても、論及すべきであったのではないだろうか。

例えば朱熹の晩年から没後に活躍した葉適（水心、1150～1223）は、浙学陳亮との関係が深い人物として知られるが、彼は「孟子性善説に批判的」であり、「その言語は、一層独善誇大の度を強めた」などとされることがある（荒木見悟氏「南宋功利学派について 陳龍川と葉水心」／『中国思想史の諸相』、中国書店、1989年5月、104～106頁）。また陸九淵の高弟として名高い楊簡（慈湖、1141～1226）も、「経書解釈の中で、「非孔子之言」を連発し、こともあろうに聖人の語を自己の一心において取捨選択する」のだという（石田和夫氏「楊慈湖思想の一検討」／『荒木教授退休記念 中国哲学史研究論集』、葦書房、1981年12月、431頁）。彼らはいずれも、慶元偽学の禁の際に、攻撃の対象とされていることから、自他ともに認める道学者であったといえるであろう。福谷氏は、「道学者にとって一番の関心は諸々の経書の内容と整合的に説明できるか、ということであった。その意味で、道学者の工夫論は、少なくとも表面的には経書解釈をめぐる議論なのである」（115頁）という見地に立脚するが、それならば、一見すると経書を軽視、無視していたとも

いえる葉適や楊簡は、南宋道学史において、いかに位置づけられるべきなのであろうか。

さらに南宋後期、朱熹再伝の門弟たちの世代より、いわゆる「朱陸折衷」論、すなわち朱熹と陸九淵の思想を、むしろ接近させていこうとする思想潮流が現れた。評者はかつて、陸九淵再伝の弟子たちに着目し、彼らが陸九淵のことに依拠することで、かえって「朱陸折衷」論を展開していったことを指摘した（『南宋後期の陸学について 包恢、袁甫、錢時を中心に』／『学習院大学文学部研究年報』66、2020年3月）が、これは福谷氏がいうところの「自分と異なる他者の考えを尊重」する陸九淵の説得術から説明することも可能であろう。しかしもしも朱熹が、福谷氏のいうように「自らの考えを絶対的に正しいと考え、他人に自分の考えを強制する」ものであったとしたならば（211頁）、のちに閩学（朱子学）の側からも、「朱陸折衷」的な発想が出現したことを説明しえない。例えば真徳秀（西山、1178～1235）の思想は、ときに「朱学を宗と為すが、雑ふるに陸学有り」とも言われるが（福田殖氏「朱子学の伝来と李退溪（滄）の朱子学の特徴」／『日本と朝鮮の朱子学』（福田殖著作選2）、研文出版、2016年10月、28頁）、朱子学の継承者を自任した真徳秀に、なぜ陸学的傾向がうかがえるのであろうか（もっともそれは真徳秀が早年、陸九淵の高弟楊簡に師事していたことに起因するのかもしれない）。

ただいづれにせよ、これらの指摘は、本書の価値を貶めるものではまったくない。むしろ評者は、南宋前期における道学諸派の思想動向を体系的にとらえた本書の意義を最大限に評価したい。近年、人文学の諸分野において、大学院生、若手研究者の減少が問題視されて久しいが、福谷氏がいる限り、当該分野の未来は明るいといえるであろう。

* 福谷彬著『南宋道学の展開』、プリミエ・コレクション 96、京都大学学術出版会、2019年3月、4,600円（税別）